言語活動を生かした道徳授業の工夫 †

渡邊　弘*
宇都宮大学教育学部*

今回の学習指導要領の改訂にともない、言語力の育成及び言語活動の充実が重要事項の一つとして提示された。たとえば、同要領の「総則」では、国語科を中核として学校教育の全体を挙げて言語力育成に立ち向かうべきであること、また各教科等のねらいそのもの、もしくはねらいと密接不離のものであり、各教科等のねらいを十分に実現するために機能するものであることなどが明示された。以上のことを踏まえて、本稿では、特に言語活動を総動員して行なう道徳授業における言語活動の工夫について考察する。

キーワード：言語力育成、言語活動、話合い活動、書く活動、聴く活動

１．言語力育成をめぐる社会的背景

（１）社会的背景と経過

はじめに、言語力の育成および言語活動が、今回の学習指導要領において重要事項の一つとなった社会的背景について概観しておきたい。

まず社会的背景としては、今日の社会状況の二つの変化が考えられる。一つは「知識基盤社会」と呼ばれるものである。これは、知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になり、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会を意味する。二つ目は「高度情報化社会」である。言語情報の量的拡大と質的変化の進展の中で、氾濫する情報から自分にとって有用な情報を選択することやそれを伝えることができる能力が一層重要になってきていることを意味する。

これら二つの社会的変化と併せて、より直接的な形で我々に国語力や言語力の重要性を意識させたのが2000年から３年に１度ずつ実施された、いわゆるPISA（Programme for International Student Assessment）調査である。この調査によって、日本の15歳の生徒の読解力や思考力の弱点が指摘されたことが挙げられる。こうした一連の背景により、我が国では、思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力などを総称した言語力の重要性が一層高まってきたのである。特に、こうした傾向が顕著に見られはじめたのは、ここ10年であるといわれる。具体的には次のような経過である。

2002年（平成14年）

文部科学大臣から文化審議会に対して、「これからの時代に求められる国語力について」が諮問され、さらに同審議会国語分科会において検討される。

2004年（平成16年）２月

「これからの時代に求められる国語力について」の答申がまとめられる。*

＊「学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育が行われる必要がある。すなわち、国語の教育を学校教育の中核に据えて、全教育課程を編成することが重要であると考えられる。」

2005年（平成17年）

中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」で示された言葉で、２１世紀は、いわゆる「知識基盤社会（knowledge-based society）」の時代であると述べている。

2006年（平成18年）２月

６月から文部科学省「言語力育成協力者会議」が開催され、2006年８月に、「言語力の育成方策について（報告書）」がまとめられる。*

＊「言語力は、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力であり、……言語力の育成を図るためには、（中略）学習指導要領の各教科等の見直しの検討に際し、知的活動に関

† Hiroshi WATANABE: Idea for Moral Training putting Language to use
* Faculty of Education, Utsunomiya University

すること、感性・情緒等に関すること、他者とのコミュニケーションに関することに、特に留意すること……」

2008年（平成20年）

中教審、1月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を答申する。3月、文科省「小学校学習指導要領」を公示する。

以上のように、当初は国語力の育成が強調されていたが、その後言語力の育成となっていったことが分かる。因みに、「国語力」と「言語力」の意味の相違について、甲斐睦朗（国立国語研究所名誉所員）は、次のように説明している。

「「国語力」と「言語力」とを比べてみよう。国語力は日本人が身につけるべき国語の知識や教養にまで範囲を広げた言葉の力を意味するのに対して、言語力は思考力や想像力、そして、それらを適切に表現する言葉の能力を意味する。つまり、生きていくうえでどういう問題があるか、その問題を解決するために、どういう資料を駆使し、どのように整理するか、考えたことをどのように組み立てていくか、自らが到達し得た内容をどのように他人に伝えるかなどの一連の思考・考察・伝達過程を含む言語活動能力という意味である。」（甲斐睦朗・輿水かおり編集『言語力を育成する学校』教育開発研究所、2009年、p.2）

また、「言語力育成協力者会議報告書」（2006年）中では、「言語」と「言語力」について、次のように説明されている。

【言語について】

① 知的活動、感性・情緒等、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成にかかわるとともに、文化の継承や創造に寄与する役割を果たすもの

② 思考するための道具。

③ 本来コミュニケーションの道具

【言語力について】

○ 知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力

（2）新学習指導要領改訂と言語力の意義・課題

今回の新学習指導要領（小学校）の第1章総則第1教育課程編成の一般方針1には、次のように明記されている。

「（前略）学校の教育活動を進めるにあたっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、発達段階を考慮して、児童の<u>言語活動を充実する</u>とともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣を確立するよう配慮しなければならない。」（下線引用者）

つまり、生きる力の育成を目的として、それを達成するために「創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する」こととしている。そして、より具体的な目標として、① 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得、② ①を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成、③ 主体的に学習に取り組む態度の育成、④ 個性を生かす教育の充実の4点であり、さらにそのための手段として、① 発達段階を考慮、② <u>言語活動の充実</u>、③ 学習習慣の確立のための家庭との連携のそれぞれ3点が掲示されている。

これら（目的）、（目標）、（手段）は、それぞれすべての教科および領域に関わることである。なお、豊かな体験・経験との関連から、思考力（ability to think）、判断力（ability to judge）、表現力（ability to express）の前提として、「感性力」（ability to sense）が重要であるのではないかと筆者は考える。

（3）国語科と各教科等における言語活動

言語力育成の中核となるのは、もとより国語科であるが、今回の学習指導要領ではとくに同教科の目的として次のような点が挙げられている。

・論理的に思考し表現する能力の育成

・互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力の育成

・わが国の言語文化に触れることによる感性や情緒の育成

また、その手立てとしては、①「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」に関する基本的な国語力を定着させること、②言葉の美しさやリズムを体感させること、③記録、要約、説明、論述などの言語活動を行う能力の育成すること、などが挙げられている。

さらに、留意する点として、単元構想を進めるためには、年間指導計画と児童の実態とを踏まえて、①当該単元で重点的に指導すべき指導事項を確定する、②その指導事項を指導するのにふさわしい言語活動を選定する、③言語活動を位置づけることで育成すべき国語の能力の一層の明確化・具体化を図る、④それら育成すべき能力を身に付けるための指導過程を構築する、といった手順で考えていくことが有効である、などがある。

一方、各教育や領域については、次の４点が挙げられている。

①これまでの言語活動についての把握・検証すること

②各教科等の目標と指導事項との関連及び児童生徒の発達段階や言語能力を踏まえて言語活動を計画的に位置づけること

③各学校における教科・領域間の関連や学年を超えた系統的で意図的、計画的な言語活動の実施に向けてのカリキュラム・マネジメントの適正な実施

④ＰＤＣＡサイクルの児童生徒の主体的な学習計画

【事例１社会科】

○調べたことや考えたことを表現する力を育てるように する。

・第３学年及び第４学年…調べたことや地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考えたことを、相手にも分かるように表現することができるようにすることが大切である。

・第５学年…調べたことや社会的事象の意味について考えたことを、根拠や解釈を示しながら図や文章などで表現し説明することができるようにすることが大切である。

・第６学年…調べたことや社会的事象の意味について広い視野から考えたことを、根拠や解釈を示しながら図や文章などで表現し説明することができるようにすることが大切である。

○観察や調査・見学などの体験的な活動を指導計画に適切に位置づけて、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにすることが重要である。

【事例２道徳】

○児童生徒が問題意識をもち、意欲的に考え、主体的に話し合うことができるよう、ねらい、児童の実態、資料や学習指導過程などに応じて、発問、話合い、書く活動、表現活動など指導方法の工夫が求められる。

○資料や体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより意見の異なる人の考えに接し、協同的に議論したり、考えをまとめたりするなど、言葉の能力を総動員させて学習に 取り組ませる。

○人に感動を与える心の美しさや強さを浮き彫りとした教材等を活用することが考えられる。

○自分自身と集団や社会とのかかわりについての考えを深めるため、公正、社会正義などの道徳的諸価値にかかわるさまざまな課題について討論等を行い考察させるような指導を行うことが考えられる。

（４）発達段階と言語活動

発達段階と言語活動の関連について、平成20年の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」おいては、個人差等はあるが、たとえば小学校の場合などは、概ね次のように説明している。

① 小学校低学年から中学年まで

→体験的な理解や具体物を活用した思考、反復練習など を繰り返し学習等の工夫による「読み・書き・計算」の能力を重視する。

② 小学校中学年から高学年

→体験と理論の往復による概念や方法の獲得、討論・観察・実験による試行や理解を重視するといった指導上の工夫が有効である。

【文科省が提示する発達段階に則した言語活動の参考事例～小学校の場合～】

【低学年】

○主語と述語を明確にして表現する。

○比較の視点を明確にして表現する。

○判断と理由の関係を明確にして表現する。

○時系列（例．まず、次に、そして、など）で表

現する。

○互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合う。

○書いた物を読み合い、よいところを見付けて感想を伝え合う。

○文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合う。

【中学年】

○判断と根拠、結果と原因の関係を明確にして表現する。

○条件文で表現する。

○科学用語や概念を用いて表現する。

○互いの考えの共通点や相違点を整理し、司会者や提案者などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合う。

○書いた物を発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合う。

○文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付く。

【高学年】

○演繹法や帰納法などの論理を用いて表現する。

○規則性やきまりなどを用いて表現する。

○互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う。

○書いた物を発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合う。

○本や文章などを読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりする。

2　道徳の授業における「話合い活動」

（1）話合い活動の意義と目的

道徳の授業においては、児童・生徒が問題意識をもち、意欲的に考え、主体的に話し合うことができるよう、ねらい、児童の実態、資料や学習指導過程などに応じて、発問、話合い、書く活動、聴く活動、さらにはさまざまな表現活動など指導方法の工夫が求められる。また、道徳の時間では、資料や体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより意見の異なる人の考えに接し、協同的に議論したり、考えをまとめたりするなど、言葉の能力を総動員させて学習に取り組ませることが大切となる。

でははじめに、言語活動を生かした道徳授業の工夫として、話合い活動について考えてみよう。

私たちは、普通、さまざまな問題や話題について話し合う場合、同じ意見や異なった意見を出し合うことにより、最終的に完全な一致はできなくとも、ともに話し合ったことによって、共通な部分をふくらませることができる。また、理解は十分できなくとも相手の立場や思いに気づき、それらの過程を通して一人では到達し得ない高みに至ることもできる。こうした点に話合いの意義があると考えられる。

では、そもそも何のために話し合うのだろうか。その目的としていくつか考えられる。第1は、自己変革ということである。すなわち、他者と話し合うことにより、自分自身が深まったり、変化したりすることである。第2は、新たな創造である。さまざまな異見・意見を出し合い、先にも述べたように、たとえひとつの結論にいたらなくても、英知を出し合い、一人では到達し得ない何かを創り出すということでである。そして第3は、よりよい人間関係の構築である。つまり、話合いのプロセスを通じて、お互いの信頼・親睦を深め、共通の目的に向かって、よりよいものを生み出す仲間としての人間関係を構築していくことである。

（2）道徳の授業における話合いの工夫

道徳の授業において、自然で活発な話合い活動が行なわれるための第1条件は、日頃からの話合いやすい学級環境づくりである考える。そのためには、教師と児童・生徒間および児童・生徒同士の信頼関係がなければならない。また、普段から、たとえば朝の1分間スピーチなどにより話すことに抵抗がないようなトレーニングも必要である。

よく研究授業などを参観すると、指導案には「話し合う」と書いてあっても、実際には「発表し合っている」だけということがよくある。「話し合う」ことと「発表し合う」こととは、両者とも言語活動上重要であるが基本的に異なる活動である。話合いは、互いに意見を出し合って問題などを解決したり、一定の結論に到達することをめざすが、発表し合いは、発表した内容に質問などがあるかもしれないが、全体的には自分の意見を一方的に出し合っているに過ぎない。

ところで、子どもたちに話し合わせる場合、教師は次の3点に留意することが重要である。それを、筆者は三つの「もたせる」と呼んでいる。具体的には、次の通りである。

① 〈興味〉をもたせる
② 〈自信〉をもたせる
③ 〈責任〉をもたせる

まず、〈興味〉をもたせるについては、子どもたちが活発に話し合えるためには、彼らが興味や関心が持てる題材でなければならず、そうしたものを教師は提示する必要がある。子どもたちの生活からかけ離れたような話題や題材では、話し合いなさいといっても話し合えるはずがない。次に〈自信〉をもたせるだが、よく道徳の授業では子どもたちから意見をしっかりと聞き取り、「受容する」ことが大切であるという。受容するということは、子ども一人一人のよさを認めるということであろう。たとえ言いたいことがうまく表現できない場合でも、また内容とずれた意見であったとしても、その発言自体は認めて受け入れていくという姿勢が教師には必要であると思う。些細なことのように思える教師の笑顔やうなずきなどが、実は子どもたちに自信を持たせるきっかけになることが意外にあるといってよい。これに関連して、映画監督の山田洋次氏は、著書『学校』（岩波書店、1993年）中で、次のように述べている。

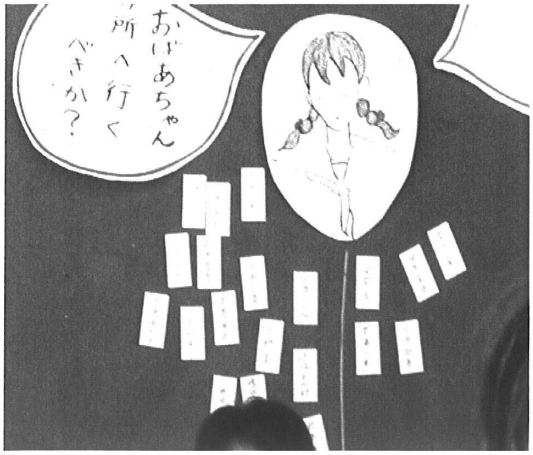
「塚原雄太さんという人は夜間中学の有名な先生だけれど、どんなに間違ってても、絶対に違うといってはいけないとよく若い先生に言いますね。とても勇を鼓して発言したのだから、発言したことをまず認めてやれと。」（p.70）

つまり、人の前で自分の意見を述べることは、とても勇気がいることでるわけであり、「勇を鼓して」とはまさにそのことを意味している。

そして、〈責任〉をもたせるについては、たとえばグループでの話合いなどでも役割を決めて話し合わせることが大切である。一般に、言語活動におけるグループ活動には、次の三つの子どものタイプがあるといわれている。すなわち、①リーダー的な子ども、②参加する子ども、③あなた任せの子ども、である。児童・生徒主体の話合いを実現していくためには、できるだけ役割を交代させるなどの手立てが必要である。

また、発達段階に応じた話合いの工夫も考えておかなければならない。たとえば小学校では、低学年の場合は、まだ話合いは難しいので、まずは自分の感じたこと、考えたことを相手に分かるように話すこと、伝えることが大切である。ソーシャルスキルトレーニングなどでしばしば行なわれるが、聴く側は、話している人の方を見てしっかりと話を聴くこと、丁寧な言葉で話すなども心がけるとよいだろう。中学年の段階では、相手の話を取り入れて、様々な立場から考え、意見を出すようにする工夫や、グループ討議も有効に活用することが大切である。高学年の段階になれば、複数の価値の側面からも考えや意見を述べられるようにするなど、討論やディベートなどを取り入れることも有効だろう。

その他、話合いを活発にするための手だてとして、次の二つの点を述べておきたい。一つは、話合いのためのルールづくりである。たとえば、ハンドサインを用いて、発言の内容を明確にすることや、発言の仕方として「結論」→「理由」といったパターンを身につけさせるなどである。もちろん、形式にとらわれすぎて実質的な中身がなくなってしまってはもともこうもないわけである。形式にこだわりすぎることのないように注意することは言うまでもない。もう一つは、よく小学校の高学年や中学校の場合に見られることであるが、意見は持っておりワークシートなどに書かせれば書くが発言はしないという場合がある。こうした場合。「ネームカード」を利用することが有効である。一般的に、各クラスには、児童・生徒それぞれのネームカードがあるはずである。それを利用することによって、だれがどのような考えなのか、ある程度わかるだろう。その上で教師は、児童・生徒を指名して意見や感想などを尋ねることができる。



3　道徳の授業における「書く活動」

（1）「書く活動」の意義と目的

次に、書く活動について考えてみよう。道徳の授業の場合、展開の中でワークシートや心のノートなどに書かせる場面を多く見る。では、道徳の授業において書く活動を導入する意義および目的とはどのようなことだろうか。

まず、一般に書くことの意義は、自分の行為や考えなどを文字化することにより、自分自身を客観的に見ることができるという点にあると考えられる。言い換えれば、「書く」という行為は、反芻するプロセスを含んでいるということである。また、「書く場所・形式・内容」を明確にし、生徒の実態に合わせて書く活動を取り入れていくことで、論理的な思考が育成されるし、発言や思考の踏み台にもなる。

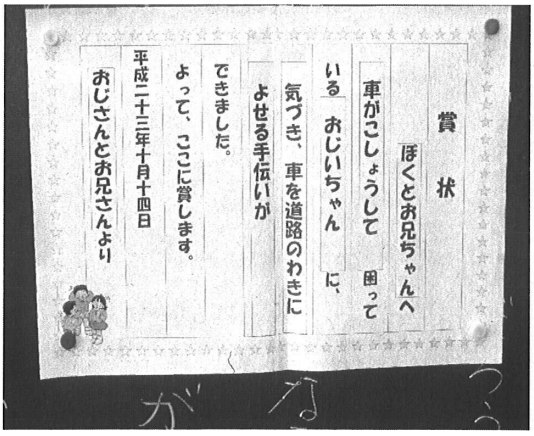
一方、道聴の時間に「書くこと」を導入する目的については、児童・生徒に日頃の生活における行動や、広くは自分自身の生き方を見つめさせ、考えを深めさせるためであると考えられる。

（2）道徳の授業における「書く活動」の工夫

道徳の授業において、「書く活動」を取り入れる場合、前もって考えておかなければならないことがある。

まず第１は、書く場所を限定し、時間を節約するということである。書く活動は思ったより時間がかかるし、また時間をとらなければ子どもたちは自己としっかり向き合えない。そのためにも、道徳授業のどの場面で書く活動を取り入れるか、設定するかということを事前に考えておくことがまず何よりも大切である。１単位時間、小学校４５分、中学校５０分の中で、書くことの場面を設定する場合、先にも述べたように、自己としっかりと向き合え、振り替えれるところが効果的である。そう考えると、読み物資料などの場合は、中心発問の部分が効果的であり、もう一つは展開後段の資料から離れて自分自身の行動を振り返り、道徳的価値の内面的自覚を図るところが有効である。

たとえば、次のような場合である。これは、ある小学校の３年生の研究授業で、ねらいは思いやる心や親切な行為を整理したり、思い出したりするために、自分や友達の思いやりのある行動を賞状に書くというものである。充実させる視点としては大きく３点設定した。第１は、賞状の形で言葉を書く抵抗感を減らし、自分の気持ちや行為を素直に表現することである。そのために授業者は、３年生という発達段階とクラスの実態を考慮して、書きやすく整理しやすいように枠を作り、さらに事例を提示して書かせるように配慮していた。第２は、見つけた親切な行動を教師が紹介するために、思い出すきっかけや、短い言葉でまとめやすくする工夫がされていた。そして第３は、賞状をもとに、嬉しい気持ちなどを教師が意図的にやりとりするために、自分の思いを思い出しながら話す（発表する）ということだった。


賞　状

ぼくとお兄ちゃんへ

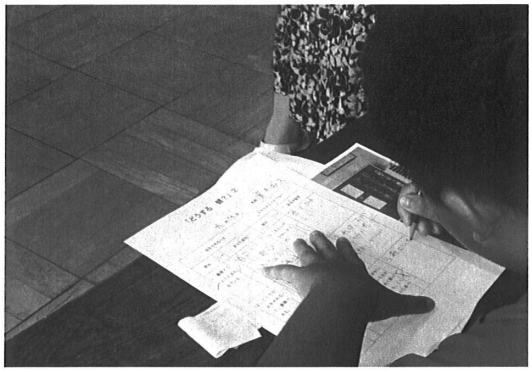
車がこしょうして　困って
いる　おじいちゃん　に、
気づき、車を道路のわきに
よせる手伝いが
できました。
よって、ここに賞します。
平成二十三年十月十四日
おじさんとお兄さんより

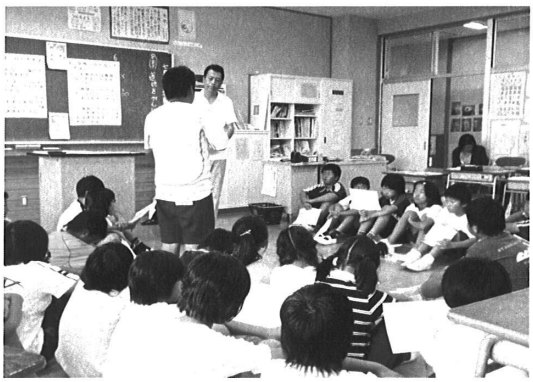
賞　状

Tちゃんへ

ぼくが友達とけんかをして
こまっている時に、ぼくをは
げましに来てくれて、友達に
いっしょ
にあやまってくれました。
ありがとう。
よって、ここに賞します。
平成二十四年十一月

もちろん、これ以外の場所でも、書く活動が有効であるところはあり得る。たとえば、モラルジレンマの授業における話合いなどの場合、まだ直接討論することが難しい場合、そのクラスの実態に応じて、発表や話合いの前段階として「書く」という行為は有効である。





なお、１時間の中に数多く書く活動を取り入れることにより、授業自体が沈滞化し平板になるおそれもあるので注意しておきたい。

また、授業全体を振り返り道徳ノートや学習の記録をポートフォリオとして書く場合などもあり、児童生徒の心の発達を継続的に見ていくために有効である。これに関して、次は、宇都宮大学教育学部附属小学校で長年実施されている「自分図鑑」の例である。

【自分図鑑】

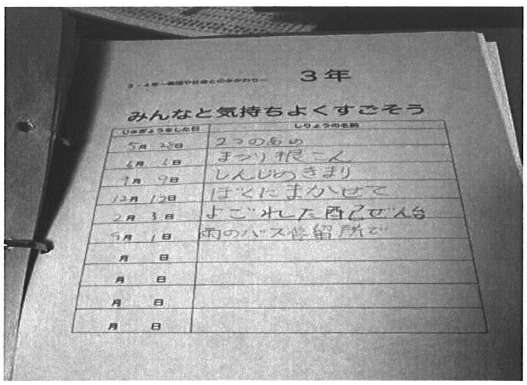
「自分図鑑」とは、一般的に道徳ファイルと呼ばれているもの（道徳の授業で使われたワークシートや資料を綴じ込んでいくもの）に、本校独自の工夫を加えたもの である。平成１０年にはじめられたこの「自分図鑑」は、子どもが年度当初に自分の道徳性について振り返るところから始まり、一年間の道徳の時間を通して「自分」の「図鑑」を創るというめあてをもって取り組んでいくものである。これにより、子どもが道徳の時間の積み重ねを感じながら、より深く自分を見つめ直したり、教師が子どもの実態に応じた授業づくりができるようになったりすることをねらいとしている。

①　自己の変容の自覚

これまでに学んだ資料やワークシートを子どもが授業の中で見返し、活用するようにした。こうすることで、自分の道徳的価値観がどのように変容してきたのかを振り返ったり、日常生活での自分の姿を想起したりして、これまでの道徳の時間での学びとのつながりを感じたり、自分の価値観が変容していることの喜びを感じたりすることができると考えた。このために、自分図鑑を以下のように作成する。学習指導要領に示されている４つの視点（「主として自分自身にかんすること」など）で資料とワークシートを分類しながらリングファイルに綴じていく。」４つの視点のタイトルには「心のノート」で用いられているタイトル（「かがやく自分になろう」など）を使い、関連を図る。目次のページを作り、４つの視点ごとに日付と資料名を書いていき学んだ内容を整理する。

② 子どもの興味、関心、実態を踏まえた授業づくり

子どもが書いた自分図鑑の内容から実態を把握し、条件設定をしたり、問題場面を作ったりすることで、主体的に話し合えるようにする資料や授業の展開を構想する。このような授業づくりにより、子どもの問題意識や素直な感情表現が生かされる授業づくりを行なう。



4　道徳の授業における「聴く活動」について

「聴く」あるいは「聴き合う」ことは、人間関係の基本です。聞く（聴く）力を育むことがコミュニ

ケーション能力を向上させるために最も大切である。たとえば、ドイツの童話作家ミヒャエル・エンデの『モモ』の中に、「話を聞くなんて、だれにだってできるじゃないかって。でもそれはまちがいです。ほんとうに聞くことができる人はめったにいないものです。」（p.22）という言葉がある。確かに、相手の話を正しく聴くことはそう簡単なことではない。

ややもすると自分の考えや気持ちを話す、発表するといった発信する方に関心が向けられがちだが、発信されたものをどう受けとめるかといった受信の方がむしろ重要であると考えられる。しっかりと相手の話す内容を正確に受けとめ、理解してその上で自分の考えと照らし合わせて相手に発信していくことができるわけである。たとえば、相手に対して適切な質問ができる人は、やはりしっかりと聴けている人である。つまり、聴き方上手な人は質問上手でもあるということである。

さて、道徳の授業でも同様に、教師が範読したり、紙芝居や絵本などの読み聞かせをしたりすることやゲストティーチャのお話などがあるが、子どもたちがしっかりと集中して聴けなければ、授業は成立しない。したがって、発達段階に即して、小学校の低学年から聴く活動の指導が重要であると筆者は考える。とくに小学校低学年段階では、効き方の一定の型を提示し、実践したりすることが大切であると考える。たとえば、ある小学校の２年生の授業で、グループで話し合うための前提として、①よい考えだね、②この言葉を足したら良くなる、③もっとこうした方がよい、といった「聴き方のポインシ」を提示し、相手により分かりやすい説明を考えるといった方法を行なっていた。型というものは、いつかはそれを脱いでいく産着のようなものであり、そのためにこうした提示を教師が行なうことは決して悪いことではなく、むしろ重要なことである筆者は考える。

おわりに

以上、本稿では、「言語活動を生かした道徳授業の工夫」と題して、特に言語力育成の背景と「話合い」「書く」「聴く」の道徳授業における言語活動の工夫について論じてきた。もちろん、ここに紹介した意外にもさまざまな言語活動の工夫があると思う。この点については、今後さらに研究をしていきたいと考えている。

最後に私たちが教科や領域において言語活動を工夫する場合、特に留意しておかなければならない点がある。それは、言語活動はあくまで教科や領域の個別の内容におけるねらいや目標を達成するための手段であるということである。この点を常に心がけておくことが肝要である。

参考文献

・文部科学省・言語力育成協力者会議『言語力の育成協力者会議第８回配付資料　言語力育成の方策について』、2007 年年。
・文部科学省『幼稚園教育要領』、2008 年年。
・文部科学省『小学校　学習指導要領』、2008 年。
・文部科学省『中学校　学習指導要領』、2008 年。
・文部科学省『高等学校学習指導要領』、2009 年。
・言語力育成研究部会編『言語力育成のための基礎的調査研究　幼稚園・小学校・中学校・高等学校』栃木県連合教育会　栃木県教育研究所、2009 年 3 月。
・言語力育成研究部会編『言語力育成のためのカリキュラム（プログラム）・デザインに関する理論的・実践的研究　幼稚園・小学校・中学校・高等学校』栃木県連合教育会栃木県教育研究所、2011 年 3 月。
・梶田叡一・甲斐睦朗編著『言語力を育てる授業づくり』図書文化、2009 年。
・渡邊　弘「言語力育成と言語活動の充実」（栃木県連合教育会誌「下野教育」第７３６号所収」、2011 年 3 月。
・山田洋次『学校が教えてくれたこと』ＰＨＰ研究所、2000 年。
・ミヒャエル・エンデ『モモ』岩波書店、1976 年。